

# 38. ケシの栽培

戦前、鳥飼中では政府の管轄下で医薬用にケシが栽培されていた。当時の栽培農家、O氏からその様子を聞くことが出来た。

## 親の代から栽培

親の代から昭和 12~13 年 (1937~38) 頃まで、飛び地の畑で 1 反くらい作っていた。村では 10 軒、ゴダンダ、ハンドウ、上才田、高槻線の辺りで栽培していた。

## ケシ栽培のこよみ

11 月、タカリ (稲刈り) が終わって畝立てて種を蒔く。鳥が来ないように初殻をかける。途中で間引く

5 月、ボンボロサン (丸いつぼみ?) が出来ると政府に登録、立て札を立てる。

6 月、白い花が咲く。花が落ちるとボンボロサンが残る。

## 眠くなる採取作業

夕方 5 時頃からボンボロサンに 1~2 本ずつ傷を付けていく。翌朝 4 時から太陽の出る前に液の採取する。A のような、割り箸の先に安全剃刀の刃を折って付けたようなものを使った。荒物屋で売っていた。

にじみ出た液を安全カミソリでコソゲて (こすり取って) B のようなカン (缶) に入れる。タバコの缶くらいの缶に柄をつけたもので、採取された乳液はドス茶色をしている。缶から C のようなドンブリバチ (井鉢) に移す。この作業はアヘンのおいで眠くなるので、鉢に一杯採るわけにはいかない。

## 収量はわずか

1 畝いっても採れる量はわずかなもの。持って帰ってタケノカワ (筍皮) に竹のヘラで D のように厚さ 3mm 程度に伸ばす。太陽に当てる。真っ黒なものである。カラカラに乾燥させて、お茶の缶のようなものに入れて役場に出す。計ってもらう。量が多なくても質が悪いと値段が安い。ええ収入になった。

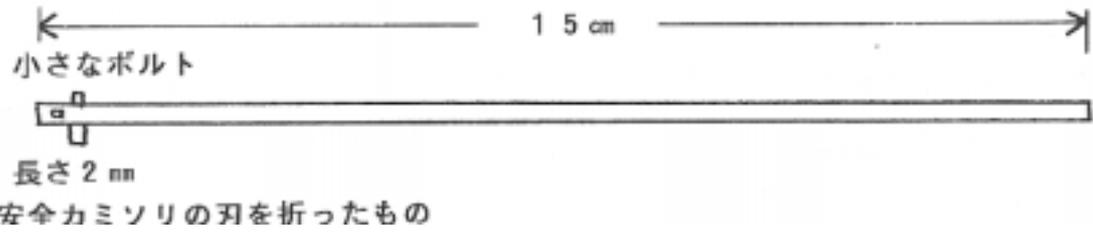
## ケシゴマは栗饅頭に

1 つの実につき 1 日に 1~2 本ずつ傷を付けて液を採取する。1 週間もすれば傷が丸い実を 1 周して採取が終わる。液を採り終わると刈り取って乾燥させる。

タライの上に板をのせて乾燥したケシを叩きつけるとケシゴマがタライに落ちる。

ケシゴマは饅頭屋に売った。買いつけにきたのだと思う。クリマン (栗饅頭) のケシゴマに売れた。

A

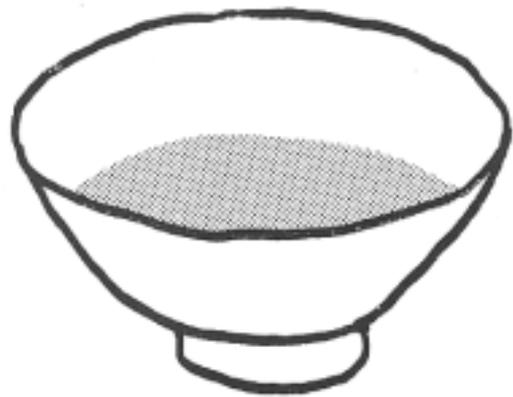


B



タバコ缶のような缶

C



ドンブリバチ

D

